

# 小説を放棄した E. M. フォースター（その 2）

岡 山 勇 一

## 1 『インドへの道』出版以降の E. M. フォースター

『インドへの道』を読み終えた読者は、人間がお互いに信頼できる親密な関係を結ぶことはひょっとして不可能なのではないかという悲観的思いに囚われてしまうかもしれない。人が誰か他人と親密な関係を結びたいと願っても、もし相手との間に人種、階級、価値観、家庭環境などの違いという広くて深い溝が横たわっている場合、その実現は困難を極めることになる。人間は本来多様な生き方をしている。従ってある人の帰属している集団の中に彼とは異質の思想や生活環境、あるいは広い意味の「異文化」で育った人物が居た場合、たとえその人が E. M. フォースターのような同性愛者であったとしても、当人の固有の生き方ををまず認めることが必要となる。西洋的合理主義を信条とするフィールディングが、東洋的文化と生活習慣を持った疑り深い性格のインド人医師、アジズと友人として付き合いおおうとした時のように、想像力をフルに發揮して相手を理解しようと努めなければならないのである。

しかし、どんなに想像力が豊かで、理解力があり明晰な頭脳の持ち主であっても、相手の感情の全てを理解することは出来そうにない。アジズのように、真の友人と思っていたフィールディングに対してひとたび不信感を抱いてしまうと、その後二度とその修復が叶わなかったように、ささいな感情のすれ違いで人間関係はもろくも崩れてしまうことがある。このような場合に求められるのが「寛容の精神」なのである。相手を心から愛することが無理な場合でも、「寛容の精神」により相手を許すことも、相手の存在に我慢することも出

来る、というフォースターの考えは今日の我々にも十分に納得できる考え方である。

『インドへの道』では、すでに述べたところからも推測できるように、フォースターはフィールディングやアジズへの感情的共感を読者に求めている。物語の結末で、二人の間に信頼を基礎とする友情が成立していないのは一つの不幸ではあると考えるしかないが、だからといって、作者は二人の間の友情は永久に成立しないと断言している訳でもない。彼は読者に悲観的思いを抱かせる結末を用意したが、本音のところでは「だからこそ人格を認めあった人間関係を結ぶことが重要なのだ」と訴えていると考えることも可能なのである。

これまで述べてきたように、『インドへの道』を出版した後の E. M. フォースターは小説家としては見るべき作品を発表していない。しかし、彼は評論家としてはめざましい活躍を見せている。当時彼が最も熱く語りたいと考えていたことは、『モーリス』で彼が訴えようとした「同性愛」を巡る自由な表現とそれに対する理解とであったはずだ。彼が『モーリス』の発表を控えていた理由はまず彼自身の「同性愛」について周囲の人々に知られなくなかったことが挙げられる。またもし彼が「同性愛」について彼自身の心情を表現した場合、その表現を巡る権力との苛烈な闘いに否応なく巻き込まれることになるかと判断していたこともその理由であると考えられる。そこで彼は、「同性愛」と「異性愛」とを問わず、およそ「性」を巡る言論・表現の自由を許容しない社会の変革がまず何よりも必要だと考えたのかもしれない。その思いが彼の旺盛な評論活動の基盤になっていたという見方に異論を唱える人は多くないはずだ。

フォースターの評論活動の中で最も注目されることは彼の自由主義と個人主義に基づく発言である。彼の中心的な思想・信条については、最も有名で、かつ最も頻繁に多くの批評家たちが言及する「私の信条」<sup>1)</sup>という評論を取り上げて紹介するのが順当であろう。この評論の初出は1938年出版の雑誌、*Nation*誌である。この評論の内容はタイトルから感じられる印象とは正反対で、「私は絶対的信条を信じない」(I do not believe in Belief.) という一文から始まって

いる。これに続いて彼は以下のように述べている。

But this is an Age of Faith, and there are so many militant creeds that, in self-defence, one has to formulate a creed of one's own. Tolerance, good temper and sympathy are no longer enough in a world which is rent by religious and racial persecution, in a world where ignorance rules, and Science, who ought to have ruled, plays the subservient pimp. Tolerance, good temper and sympathy—they are what matter really, and if the human race is not to collapse they must come to the front before long. (*TC*, 65)

フォースターの見るところでは、現代は信念の時代であって無数の戦闘的信条が横行しているから、自衛のために誰もが自分の信条をつくらざるを得ない状況にある。宗教的、民族的迫害によって引き裂かれ、無知が支配するようになった世界にあって、本来科学が支配的役割を果たすべきはずのところ、その科学が卑屈なおべっかつかいに成り下がってしまっている。このような現代にあっては、寛容とか善意、同情などは尊重されない。しかし、寛容、善意、同情——本来こういうものこそ大事なのであって、人類が滅亡を免れることになれば、遠からずまたこういうものが前面に出てくるはずだ。フォースターが上記引用文で言おうとしたことは以上の通りである。

フォースターのこのような考え方の前提には彼自身の間人観が横たわっている。彼はリスナー (*Listener*) 誌の1940年9月26日号に掲載された「文化と自由」というタイトルの評論において、当時のナチスの国家社会主義の思想だけでなく、その文化政策についても痛烈な批判を投げかけている。その中で、国家が文化を支配・管理することは人間存在の自然をどれほど損なうことになるかについて次のように述べている。すなわち、もともと人間は能率一辺倒の勤勉な生き方をしているわけではない。そういう生き方をしている人間は少数であり、大部分の人間は毎日の生活の中でかなりいい加減な生活を送ってい

る。彼らは国全体の文化とか、人類の幸福などということはほとんど意識せずに生活しており、その時々を乗り切るための些細な工夫をしたり、退屈を紛らせているうちに、いつのまにか生活それ自体が変わっていく。これが社会の現実であって、それこそが文化の本来のあり方である。つまりこの世は多様な人間が「のろのろ、だらだら、いい加減に」(slowly, easily, lazily)生きて、一定の文化を形成している。そうした実状にある人間に対して、絶対信条＝「人間に完璧さを要求する苛烈な理想主義」<sup>2)</sup>を持ってと求めること自体がそもそも無理なことなのである。仮に何かを信じるとすれば「個人的な人間関係の価値」しかないのではないか、これがフォースターの人間理解であったようだ。

この個人的人間関係の重要性について、フォースターはさらに次のように述べている。

Personal relations are despised today. They are regarded as bourgeois luxuries, as products of a time of fair weather which is now past, and we are urged to get rid of them, and to dedicate ourselves to some movement or cause instead. I hate the idea of causes, and if I had to choose between betraying my country and betraying my friend I hope I should have the guts to betray my country. (TC, 66)

フォースターの自由主義・個人主義を説明する時にこの文章はあまりにも頻繁に引用されるので、手垢がついてしまっているとすら言えそうだが、ここで言及せずに済まず訳にも行かない。彼の意見では、個人的人間関係は、今日ではブルジョア的な贅沢であり、すでに幸福な過去の時代の遺物だと見られている。そんなものは捨ててしまって、それに代わって何か政治的な運動とか主義に身を捧げると迫られるが、「私は、この主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇気を持ちたいと思う。」これがフォースターの最も強く言いたかったことである。

一人の個人主義者にして自由主義者であるフォースターにとってナチスの国家社会主義は一言で言えば人間の自然なあり方に反するということになる。この評論の趣旨について小野寺健氏は次のような見解を示している。

キリスト教も、社会主義も——つまりすべての絶対信条は——人間に完璧さをもとめたために、血で血を洗う戦いを招いた。だから絶対信条は危険なのだ——これが今世紀に最も頻繁に引用された言葉の一つと言われる「私の信条」の主旨であって、これはもっぱら現世の存在としての人間についての判断である<sup>3)</sup>

この引用文は「私の信条」の主旨について実に簡潔で的を射た見事な要約になっていると言える。

この「私の信条」という評論はドイツのファシズムとの戦争が不可避となりつつあった1938年に、民主主義を擁護する目的で書かれている（7月16日号の *Nation* 誌）。フォースターはこの頃、反ファシズムの一大キャンペーンを張っていた。人間の自由を前提とし、個人の多様性と批判を許容し、個人相互の友情と信頼の上で自己実現が図れる社会、それが民主主義社会である。ところが絶対信仰（キリスト教や全体主義など）を基礎とする社会はこれを認めない。もし、国家の、あるいは民族、社会、政党、企業などの大きな組織に一大事が起こって、それに対する忠誠心を貫徹すれば親しい友人を裏切ることになる、といった事態に立たされたとき、彼は大胆にも国家等の組織を裏切ってでも友人との信頼を大切にすると宣言しているのである。フォースターは一人の自由主義者、個人主義者として、言論がまだ比較的自由なこの時期に、自己の生きる根拠としての己自身の「信条」をここで吐露しているのである。

また、時代はずっと下った第二次世界大戦終結後の1946年にBBCから放送された講演「現代の課題」(“The Challenge of our Time,” *Listener* [April 11, 1946]) の冒頭でフォースターは自らの立場を次のように宣言している。

“Temperamentally, I am an individualist. Professionally, I am a writer, and my books emphasize the importance of personal relationships and the private life, for I believe in them.” (TC, 54) すなわち、フォースターは自らの性格を個人主義者であること、個人的人間関係と私生活の重要性を強調する内容の書物を書く職業作家であることを宣言しているのである。

更に、彼は自分が歴史的にどの時代を生きている存在なのかについて次のように語っている。

I belong to the fag-end of Victorian liberalism, and can look back to an age whose challenges were moderate in their tone, and the cloud on whose horizon was no bigger than a man's hand. In many ways it was an admirable age. It practised benevolence and philanthropy, was humane and intellectually curious, upheld free speech, had little colour-prejudice, believed that individuals are and should be different, and entertained a sincere faith in the progress of society. The world was to become better and better, chiefly through the spread of parliamentary institutions. (TC, 54)

この引用文でフォースターは自らを「ヴィクトリア朝的自由主義の尻尾にぶら下がっている人間」と規定し、いろいろな点ですばらしいことが実践されていた古き良きヴィクトリア朝へと思いを馳せている。当時は「慈善事業とか博愛事業が盛んに行われ、人道的で知的好奇心が強い人々が多かった。また言論の自由が信じられていて、皮膚の色による差別は少なく、個々の人間はちがっていて当然とされ、社会は進歩するものだとは本気で信じられていた。世界は、議会制度さえ普及すればどんどん改善されると考えられていた。」と述べている。これらの言葉を書いている時、フォースターは非常に暮らし易かった生活が実現されていた彼の両親や彼自身の少年時代の古き良き時代を思い出していたはずである。

この講演は第二次世界大戦が終わった直後に放送されているので、この講演題目の「現代」とは大戦後の経済的混乱が収まっていない時期、すなわち 1945～6年頃を指している。フォースターは「現代の課題」、すなわち、大混乱を来した時代、飢餓や挫折、崩壊の危機に瀕している経済基盤、これらに対処する方策（戦後の再建計画）が求められている当時であって、社会全体の経済的再建を優先して、個人の自由を犠牲にするやり方を批判し、こうした傾向に警鐘を鳴らすことを意図していたようである。個人の自由な生き方を制限する国家や社会の強権的なやり方を許さず、あくまでもふつうの個人の存在を擁護する立場を貫こうとしていたのである。

フォースターが「個人的人間関係と私生活の重要性」を信じる作家であることは、上記の二つのエッセイでも窺える。彼はこの人間関係の基礎になるものは「愛」であり、私生活ではこの「愛」が最大の力になりうると信じている。この点についてはもう一つの有名な評論である「寛容の精神」にフォースターの姿勢が明確に表明されている。彼は第一次世界大戦によって崩壊してしまった文明の再建に当たって有効な力になるものは一体何であるかを問いかけている。かつては「愛」こそがその究極の力であり拠り所と見なされていた。しかしある一つの民族が別の民族のせん滅に取り組んだという悲惨な事件を阻止し得なかったキリスト教文明の崩壊を目の当たりにしたあと、その西洋文明の再建といった大きな課題に対して果たして「愛」が有効な力になるのであろうか。この問いに対する彼の答えは「否」であったようである。というのも「愛」は感情と不可分のものであり、人間は「直接に知っている人でなければ愛せない」存在であるからだ、というのがその理由だと考えている<sup>4)</sup>。では「愛」に代わる一体何が、大戦後の村や町、都市や国家等の再建に必要なのであろうか。

この点について、フォースターは「寛容の精神」(“Tolerance”, *Listener*, [July 31, 1941]) の中で、“In public affairs, in the rebuilding of civilization, something much less dramatic and emotional is needed, namely tolerance.” (TC, 44) と述べている。すなわち「文明の再建には、感情とはあまり縁のない〈寛容の精神〉

を持つことが必要だ」というのである。つまり、「どんな相手でも、何事に対しても我慢して、共同体や企業、階級、民族の再建に当たるしかない」(“This [Tolerance] is the sound state of mind which we are looking for. This is the only force which will enable different races and classes and interests to settle down together to the work of reconstruction.” *TC*, 44)。例えば、第一次世界大戦後のドイツの再建を例に取れば、英国人が「ドイツ人を愛する」ことは無理である。しかし「寛容の精神」から彼らを許すこと、彼らの存在に我慢することは出来る。そのためには相手の立場に立ってものを考えることが必要となる。そして、相手のことを思いやるためには**想像力**が不可欠だ。他人の立場に身を置くという不断の努力を可能にするものこそ「寛容の精神」であり、これなくしてはいかなる人間同士の、あるいは階級間、人種間、国家や民族間の良好な関係も築くことは出来ない<sup>5)</sup>。以上がこの評論の骨子である。

このようなフォースターの洞察は、ナチスによるユダヤ人の大虐殺、スターリンの大粛正、日本の南京大虐殺等の幾多の事例を持ち出すまでもなく正鵠を得ていると言える。こうした人類の悲惨な歴史を作り出した背景には「絶対的信条を持った個人や国家、集団」とそれに同調した、あるいは従わざるを得なかった人間集団が存在している。もし彼らが「寛容の精神」の持ち主であったとすればこうした不幸は避けられたかも知れないと考えられるのである。

しかし、フォースターは決して楽観的に考えている訳ではない。上記の点について彼は「寛容の精神」において次のように述べている。

... it is very easy to see fanaticism in other people, but difficult to spot in oneself. Take the evil of racial prejudice. We can easily detect it in the Nazis; their conduct has been infamous ever since they rose to power. But we ourselves—are we guiltless? We are far less guilty than they are. Yet is there no racial prejudice in the British Empire? Is there no colour question? (*TC*, 46)



ここでフォースターは、他人の狂信的な人種的偏見を指摘することは容易であるが、自分のそれを見抜くのは極めて困難であると述べ、さらに次のように問いかけている。例えばナチスのユダヤ人大虐殺をイギリス国民は激しく非難するが、果たして彼ら（大英帝国）には「人種的偏見」がなかったと断言できるのだろうか、と。フォースターはこのエッセーの末尾で、このような疑問を發し、英国国民も自己批判的反省が必要なのではないかと呼びかけている。（彼のこのような主張からも、彼がきわめて良質の批評家精神を有していたと断言しても良い。）

この疑問に正面から答えようとした作品が、実は『インドへの道』であったと言ってもよい。この作品は上記の「寛容の精神」が書かれた時よりも15年も前の1924年に出版されている。彼は1924年以降、一冊も小説を書いていない。この時彼は45歳だったが、その後の彼の作家活動は、これまで縷々説明してきたように、もっぱら講演をしたり、評論を書いたりすることが中心であった。国際ペンクラブの会長なども務めている。しかし『インドへの道』で偉大な作家としての地位を築いていながら、何故彼は小説を發表しようとしなかったのであろうか。

## 2 W. ストーンの見解

『インドへの道』を出版した後、フォースターが小説創作を放棄した理由については、これまで様々な立場の研究者や批評家、あるいは作家たちが、いろいろな角度から検討を加えている。ここでは、まず最初に、フォースターがまだ生きていた1966年に出版された研究書、『洞窟と山』(*The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster*, 1966)の著者であるウィルフレッド・ストーン(Wilfred Stone)の見解について紹介する。その次に、定評のあるフォースターの伝記を書いたニコラ・ボーマン(Nicola Beauman)の所説について検討する。

ストーンは『洞窟と山』の「序文」で、彼がこの研究を完成するまでに8年もの年月を要したこと、1957-8年、及び1965年にはフォースター自身と親密な交流を持ち、彼との対話や共通の行動を通して彼の人となりを知ることができたこと、その成果がこの書物であると述べている。ストーンはフォースターがこの書物を読んだことはないと断言しているが、執筆中はその可能性はあった訳なので、フォースターに対するかなりの遠慮があったと思われる。しかし、フォースターの作家としての本質を見抜き、彼が『インドへの道』の出版以降、小説を書くことを止めた理由については示唆に富む見解を述べている。

まずストーンはフォースターの小説家としての経歴を以下のように簡潔に要約している。

Forster's only continuously productive period as an artist was the decade between 1902 and 1912, when all of his published fiction except *A Passage to India* was written. *Passage* (1924) was a kind of sport, the Indian summer of a talent that had shown marked faintness and weariness even before World War I. The novel was a superb flowering, but it was an end, not a beginning. With it the poetry stopped—though not absolutely—and the literary and social criticism began. There were, to be sure, other writings: histories, biographies, pageants, reviews, librettos, radio talks, letters. But they were not, in any serious sense, art. (CM, 11)

ストーンはフォースターの作家活動の最盛期は『ハワーズ・エンド邸』を出版した1912年までの約10年間であり、その後彼の作家としての才能は伸びていないと述べている。彼の最高傑作だとして高い評価を受けている『インドへの道』は「気晴らし」のようなものであり、それを境にして彼の芸術家としての生命は終わった。ストーンの『インドへの道』に対するこのような捉え方につ

いては直ちに異論が出てきそうであるが、その他の点については彼の作家としての経歴を実に簡潔に言い表した文章であると言える。

フォースターの定評のある伝記としては、1977年に出版された P. N. ファーバンク (P. N. Furbank) のもの (*E. M. Forster: A Life*, 2 vols) がある。この本はニコラ・ボーマン (Nicola Beauman) の『モーガン：E. M. フォースターの伝記』(*Morgan: A Biography of E. M. Forster*)<sup>6)</sup> が1994年に出版されるまでは多くの研究者によって最大限の敬意が払われた伝記であった。フォースターの伝記『モーガン』は、フォースターの6つの作品に共通するテーマである「故郷喪失」に焦点をあてた考察を行っており、彼が、いわば「ホームレス」の作家として、生涯にわたって安住の「家」を求めて各地をさすらい、その土地の「地の霊」(*genius loci*, the spirit of the place) に影響を受けながら作家活動を続けて来た様子を浮き彫りにしている。

ボーマンはその序文で、『モーガン』を出版した真のねらいについて次のように述べている。

This biography tries to answer a question: where did E. M. Forster's novels come from? How was it that a 'provincial of settled habits' wrote five of the greatest novels in our language before he was thirty-five and his sixth before he was forty-five? And why did he then abandon fiction? (*M*, 1)

この引用文に示されているように、ボーマンはフォースターが35歳までに5つの傑作小説を書き、45歳までに6作目を書き上げた後、突然創作の筆を折った、その理由を明らかにしようとしている。フォースターが学んだケンブリッジ大学のキングス・カレッジ図書館に「現代文書部」(Modern Archives) というセクションがあり、ここには彼の残した原稿、タイプ草稿、手紙、写真やメモ書きなど、彼の素顔を知ることのできる多くの貴重な資料が所蔵されている。彼女はこれらの資料を丁寧に読み、先行研究との整合性についても配慮

しながら『モーガン』を書き上げている。彼女はフォースターが小説を放棄した理由や経緯についても一章を割いて丁寧な検証を行っている。

以上のように、ストーンもポーマンも1924年以後のフォースターの「転身」についてはきわめて強い関心を抱いている。しかし、その「転身」の理由についてはそれぞれ異なった観点から説明している。まずストーンの見解について検討しておく。

W. ストーンの『洞窟と山』は、最も初期のフォースターの研究書として定評のあるL. トリリングの『E. M. フォースター』(1944年出版、改訂版は1967年の出版)以降、最も膨大でかつ詳細なフォースター論として1966年に出版されている。その第一章は“Introduction: Poetry and Prose”というタイトルが付けられている。この「詩と散文」という言葉は『ハワーズ・エンド邸』のマーガレットの言葉を思い出させる。この物語の中で、「詩心」を持つ女主人公のマーガレットはきわめて散文的で合理主義的精神の持ち主であるヘンリー・ウィルコックスと結婚する。彼女は自分たちの結婚を「詩(=情熱)と散文」との結びつきであると捉え、相対立するものの和合によって愛を育むことが出来ると考えている<sup>7)</sup>。マーガレットがヘンリーとの結婚を決意する場面でこの“Poetry”と“Prose”という言葉が用いられているのである。

この作品に限らず、フォースターは相対立する概念や観念、あるいはそれらを体現する人間同士の衝突や葛藤、ならびにその和合や統合などについて描くことが多い。例えば『ハワーズ・エンド邸』のシュレーゲル家とウィルコックス家、田園と都市、また、『インドへの道』ではフィールドイングとアジズ、キリスト教とイスラム教、西洋文化と東洋文化の対立などその実例は枚挙にいとまがない。

西洋のキリスト教文明にあっては、人間の本质を二元論で捉えようとする傾向が強いということは周知のことと思われる。ストーンは『洞窟と山』の書き出しのところで、

In 1840 John Stuart Mill declared that “Every Englishman of the present day is by implication either a Benthamite or a Coleridgean.” It is a brilliant oversimplification, not only describing an age’s self-division but also suggesting that division itself, self-alienation, is the essential character of that age. (CM, 3)

と述べ、「英国人はことごとくベンサム派かコーリッジ派かのどちらかである」という J. S. ミルの言説は当時の時代情況の本質を捉えた言葉だと見なししている。

ストーンは、このような二元論で人間の本性を捉えようとするやり方はキリスト教の伝統的考え方に則ったものであり、西洋人にとってとりたてて新しいことではないと述べた上で、この両派の対立を機械的人生観と有機的人生観の対立、分析と創造的総合の対立、さらには、合理主義とロマン主義との対立、功利主義と反功利主義との対立であると説明する。前者を代表する者が啓蒙主義の息子であるベンサムであり、後者を代表する者がロマン派の詩人コールリッジである。

ミルが1840年時点で提起した「ベンサム派とコールリッジ派の対立や共存」は一つの時代の中で見られることはもちろんであるが、この対立は一個人の中にあっても見られる。それが近代化（工業化）以降の社会の偽らざる様相であり、それ故に、ストーンは、その対立（または分裂）をいかにして弁証法的に統一するのか、という問題こそ人間が真に解決しなければならない問題であると述べている。ストーンのような指摘を待つまでもなく、フォースターの作品に登場する人物の多数がベンサム派かコールリッジ派に属している。彼らはどちらかの方法に従って目の前の課題を解決しようとする。ベンサム的方法の基本は「分析」にあり、全体を個々の部分に分けて捉えようとするにある。ベンサム型人間は、社会であれ、個人であれ、それを全体（それを構成する部分の総計以上に意味や価値を持つものとするコールリッジ的方法）で見よ

うとせず、全体から切り放された一部として捉えようとする。その典型的人物こそ『ハワーズ・エンド邸』のヘンリー・ウィルコックスである。

ストーンはこの後さらにフォースターがいかにコールリッジとよく似た考えを持っていたのかについて次のような説明をしている。

Forster's concern, like Coleridge's, is with restoring the nymphs, guarding them against further harm, and creating conditions in which they can flourish. To Forster, man's loss of respect for his own naive experience, the withering of his capacity for wonder, the repression of feeling, and the denial of his myth-making powers are deadly serious matters. He has no plan of action (beyond the wish fulfillments of art) for bringing the nymphs back or for removing the barges, but he is convinced that somehow poetry must be joined to prose or we shall all shrivel up and die. (CM, 7)

19世紀中に英国社会の大規模な工業化が急速に進み、英国人がこよなく愛してきた田園・自然が破壊され、妖精が出てきそうな場所もほとんど見られなくなる。そのような国土の表面における物理的変化は、それだけに止まらず、人間の心から自然への敬意や驚異の気持ちや感性を衰退させ、神話を作り出す能力、すなわち「詩心」を喪失せしめた。フォースターは「詩心」を取り戻すための具体的な行動に出たわけではないが、現代の無味乾燥な散文的現実と詩とを結びつけることの重要性、切実性については明確な認識を持っていた。これがフォースターに対するストーンの見識であった。

フォースターが「自分はヴィクトリア朝自由主義の尻尾にぶら下がっている人間だ」と述べたのは1946年のことである。そのような言葉で自己の存在を規定しようがしまいが、彼は「詩と散文」とが分裂した時代、ものの全体性が失われ、人間の魂が断片化した時代を引きずって生きる作家であった。そのヴィクトリア朝の作家たちの置かれた状況について、ストーンは次のように説

明する。

If Victorian writers agreed upon one thing, it was that *their age was ugly*. But the ugliness had political, social, and economic roots; it could not be corrected by pretty pictures or by books with happy endings, and it could not be decorated out of existence. Some artists were drawn to socialism; some translated their esthetic objectives into commercial and popular terms; most became part-time economists, political theorists, social critics. But nearly all of them suffered as artists. (Italics mine. *CM*, 9)

ここで指摘されている「醜いヴィクトリア朝」が出現した根本的な原因は英国社会の工業化にあることはもちろんだが、その進展を人間の幸福へ向けてスムーズに導くための政治・経済的仕組みや条件整備が出来ていなかったことにある。十分な教育の普及、貧困からの脱出、労働条件の改善、など困難な課題が山積していた時代にあって、芸術家は本来の仕事を一時的に棚上げにして、政治家や経済学者、あるいは社会批評家などに職業を変えて、時代の病根の駆除に本格的に取り組むか否かの選択を迫られることとなった。特に良心的な芸術家ほどより切実にその決断が迫られたのである。その極めつけの代表者がマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) である。ストーンが、“While still a young man, Arnold virtually abandoned poetry for literary, social, and religious criticism.” (*CM*, 9) と述べているように、アーノルドは「詩」を捨て、「時代の課題に取り組んだ芸術家」であったと見ることができる。

このアーノルドの直接の先輩はコールリッジである。彼もアーノルドに先だつ先輩詩人として、若い間に最良の詩を書き、その後想像力の枯渇に苦しみ、結果としては批評家に転身した「詩人」である。フォースター自身もコールリッジに対してこれと同じ見方をしていたようである。

Coleridge, as Forster notes, “wrote all his best poetry when he was a young man of twenty-five, in a single year,” after which a slow paralysis of his creativity set in. The poet gave way to the critic, the creator to the theorizer.” (CM, 8)

この引用で述べられているように、コールリッジは25歳を過ぎたあとは、詩人としてではなく批評家として生きて行くしかなかった、というストーンの見方には異を唱える人もいると思われる。しかし、コールリッジとその後継者たるアーノルドの二人とも彼らが生きた時代情況、時代精神と誠実に向き合い、その結果として結局「詩心」を失う羽目に陥ったという事実は否定できない。

これら二人の詩人が辿った軌跡とほぼ同じ道を歩いた後継者がフォースターである、というのがストーンの見解なのである。ストーンはまずフォースターは芸術家であるとともにモラリストであり、詩人であるとともに散文作家であり、さらに小説家であるとともに社会批評家であると捉えている<sup>8)</sup>。フォースター自身、固有の感性を持ち現実社会からは一定の距離を置いて「私的」世界において芸術を追求する作家である。一方では、自らの拠り所を知的貴族の伝統に求め、「公的」な現実世界においては強い社会意識を以て時代の課題に取り組むことを余儀なくされた人間だと自覚していた。彼は自己の中にこれら両面を抱え込んでいた故に、内部の「緊張感」を如何にして統制するのかに苦慮せざるを得なかったのである。彼の生きた時代が「分裂」の様相を見せていたのと同じように、彼自身の人生もいわば「引き裂かれた状態」に置かれることとなったのである。

フォースターの作家としての経歴にもこの「分裂」があったことがはっきりと見て取れる。この点について、ストーンは次のように述べている。

This division has shown itself in a dramatic way: Forster published no fiction after 1924, when *A Passage to India* appeared. When he was forty-



five the “poetry” virtually ceased and gave way to prose; the artist turned critic. “I somehow dried up after the *Passage*,” he wrote. “I wanted to write but did not want to write novels.” If that kind of statement were peculiar to Forster, it would be nothing more than a confession of a personal failure. But it is not peculiar to him; it echoes a dozen similar confessions from the last century and this. (CM, 8)

フォースターが小説家としての筆を折ったのは彼が45歳の時であり、コールリッジやアーノルドに比べればずっと遅い年齢での「転身」だったと言える。彼自身、1959年頃のインタビューの中で、「『インドへの道』の出版後、自分の想像力は干上がってしまった。書くことを止める訳ではないが、小説を書く気にはならない<sup>9)</sup>と語ったとのことである。なぜ彼はこの時このような気持ちになっていたのであろうか。ストーンはフォースターのこの決意表明は彼の固有の事情によるものではなく、19世紀のコールリッジやアーノルドなどと同じように、20世紀初頭の時代情況が彼にそのような選択を迫った結果だと考えている。しかし、このストーンの認識については直ちに異論が出てくるだろうと思われる。（この点についての議論は後述する予定のニコラ・ボーマンの所説について検討する際に改めて行いたい。）

フォースターの想像力が枯渇し、小説執筆を止めることを決意した理由についてのストーン説明は以下の通りである。

Those two great historical changes—the passing of the countryside and the passing of the Victorian family—were main forces drawing Forster from fiction to exposition, from poetry to prose. “I don’t fret over the changes in the world I grew up in. But I can’t handle them,” he wrote. Near the conclusion of *Howards End* the “red rust,” the smog of London, is seen on the horizon, a not-too-distant threat (in space or time) to the still unravaged countryside. The

ugly cancer of suburban housing developments and industrial filth is moving in.  
(*CM*, 12)

ここでは、フォースターの生きた時代の大きな変化に彼がついてゆけなくなったことが彼の断筆の主な理由だと説明されている。20世紀への変わり目の頃から英国では急激な都市化が進み、その悪弊が次第に田園地帯にまで及んで来る事態になりつつあった。この田園破壊という脅威についてフォースターは手の施しようもなくなただ立ちすくむだけであったようだ。『ハワーズ・エンド邸』の結末あたりには、上記引用文でも触れられているように、ロンドンが吐き出すスモッグや工場の「赤錆」がハワーズ・エンド邸のあるハートフォードシャーあたりからも目に入るようになったこと、すなわち都市の「汚れ」がそれまで手つかずであった美しい田園へと侵入してきたことを象徴的に示す場面が描かれている。この場面をフォースターがどんな思いで書いていたのかを想像するだけで、彼が一体どのような窮地に陥っていたかが推察できる。

『ハワーズ・エンド邸』の物語の背景となっている時代は、作品中で言及されているいくつかの事実から推測するに、1900年を少し過ぎたあたりの4年間であることが分かる。当時、ロンドンの人口の過密化を緩和するため、あるいは住環境の整備・改善のためロンドンの近郊に衛星都市を建設する構想が持ち上がっていた。ハワーズ・エンド邸のモデルとなった「鳥の巣荘」(Rooksnest)と呼ばれた邸は今もロンドンの北方のスティーブネッジ(Stevenage)という小都市に残っている。この邸はフォースターが1883年から1893年に至る10年間を過ごした家である。

スティーブネッジの北隣にはその名も「レッチワース・ガーデン・シティ」(Letchworth Garden City)という衛星都市があり、またやや南のロンドンに近いところにも「ウェルウィン・ガーデン・シティ」(Welwyn Garden City)という名前の衛星都市がある。これらの諸都市はちょうど『ハワーズ・エンド邸』の背景となっている時代に建設された新興の衛星都市の名残であると思われる。

る。それまで先祖代々から受け継いで来た最良の農地や美しい自然が都市開発の名の下に蹂躪される事態を迎え、フォースターは田園擁護の立場をとるのか、それとも労働者に対して良質の住宅を供給するという経済的・社会的要請を支持する側に立つのか、至って難しい判断を下さねばならなくなっていたのである。フォースターの求める理想と現実社会との間のギャップ、これをどのように適切に埋めるのか、この問題を前にして彼は立ち往生するしかなかったようだ。なぜならば衛星都市構想に代表される社会的・経済的な要請によって自然や田園がひとたび失われてしまうと、そこで営まれてきた生活も伝統もすべて失われてしまい、もはや取返しがつかなくなるのである。田園破壊に対する精神的代償はどこにも求めようがないのである。本音のところではフォースターは「田園」の側に立つ人間であるが、だからといって「都市」の要請を一顧だにしないという姿勢にも、社会救済という観点からは、問題があると考えていたようだ。

窮地に陥ったフォースターの内面の葛藤がどれほど激しいものであったのかについては、想像の域を出ないが、結局のところ彼の下した結論は小説を書かないこと、とりわけイングランドを背景とする小説は書かないこと、というものであった。現実生活の上では、1924年以降、彼はロンドンの南に位置するサリー州のアビンジャー・ハマー村にある「ウエスト・ハックハースト」(West Hackhurst) と呼ばれる屋敷へと引っ越して、田園生活への思いを少しでも満たそうとしたのである。

ストーンはすでに引用した文章の中で、フォースターに小説の執筆を止めさせることになったもう一つの大きな変化とは「家族生活の消滅」(“the passing of the Victorian family”)である、と述べている。ここで彼にとっての「家族」とは、まず、母と子の二人だけとなった彼自身の家族を指す。もう一つはストーンの“the family as a value, as a symbol of a certain kind of integrity”(CM, 15)という言葉が示唆しているように、ある種のまとまりのある集団または価値観を象徴するような「家族」、及びその家族の住む家そのものを指している。

いまさら言うまでもないが、バターシー・ライズ (Battersea Rise) にあった彼の曾祖父の家—この家は36室もの多数の寝室、広い図書室のある大きな屋敷であったが—この家を彼は一つの聖地 (Sanctuary) であると受け止めていたようだ。フォスターはこの家に実際に住んだ経験はなかったが、しばしばこの家を訪れ、みずからの「ホームレス」感を紛らわそうとしていたようである。

『モーガン』の中でニコラ・ボーマンはフォスターの魂の故郷としての「家」への思いについて興味深い考察を行っており、このことについては後述するが、ストーンもフォスターにとって「家」がどのような意味を持っていたのかについて十分な検討を加えている。ストーンは“Houses, for Forster, were living symbols of an emotional and spiritual security that he had only tasted in his half-orphaned experience.” (CM, 16) と述べ、「家」はフォスターにとっては心の拠り所、精神の安定の場であったと見ている。とりわけ彼にとって重要な意味を持っていた家は彼の先祖であるソーントン一族が住んだバターシー・ライズの屋敷であった。ストーンはこの屋敷の表す象徴的な意味について次のように述べている。

Life at Battersea Rise was to him [Forster] a moving demonstration of how, in the right circumstances, “private decencies can be transmitted to public affairs.”

Another part of what Forster means by the passing of the family is the passing of manners, of the conventions. (CM, 16)

この引用では、バターシー・ライズの屋敷は単なる大きな建物ではなく、人間の尊厳や美徳が代々継承されて来た場所であり、人間がヒトとして身につけるべきマナーや約束事が継承される場でもあるとされている。つまりはそこには精神の貴族性を基盤にして営まれる良質の生活があった。しかし、フォスターにとって人間存在の「全体性」を生活の中で実感することの出来た場所としての「家族」も「家」も消滅しつつある事態を前にして、ここでも立ち往生す

るしかなかったようだ。フォースターは自らの理想とする生活と現実の社会の実態との間のギャップを埋めることが出来なかった芸術家であり、ある意味では敗北者であるといえることができる。

しかしながら、フォースターの小説家から批評家への転身の理由に関するストーンの所説には一定の説得力があるとは言え、十分であるとは言えない。というのも、ストーン『洞窟と山』が出版された時点ではフォースターの同性愛の性向を巡る議論は出来なかったからである。『インドへの道』の出版以降、彼が小説執筆を止めた理由について検討しようとする多くの批評家が何度も言及するフォースター自身の「二度と小説を書くつもりはない」という決意表明の言葉が公表されたのは1985年に出版された *Selected Letters of E. M. Forster* に於いてであった。彼の友人の Siegfried Sassoon 宛の手紙文の中の次の一節がそれである。

I shall never write another novel after it [*A Passage to India*]—my patience with *ordinary people* has given out. But I shall go on writing. I don't feel any decline in my 'power'. (Italics mine. *SL* Vol. II, 45)

この文章の中の“ordinary people”というのは異性愛者たちを指し、フォースターはこれら「ふつうの人々」の間の恋愛や性について書き続けることにはもう我慢できなくなったと告白しているのである。つまり、彼は小説の中で同性愛について、あるいは同性愛者について自由に書くことのできない状況ではもはや小説を書くつもりはない。しかし書く力が衰えた訳ではないので、書くこと自体を止めるつもりはないと述べているのである。

### 3 N. ボーマンの仮説

前節の最後に言及したフォースターの手紙文を手がかりにしながら、フォー

スターの小説放棄の理由について納得の行く考察をしている研究者の一人がすでに名前を挙げておいた『モーガン』の著者、ニコラ・ボーマンである。彼女は『モーガン』の第28章「アビンジャー」に於いて、『インドへの道』出版以降のフォースターの執筆状況についてまとまった考察を加えている。彼女はこの第28章を “It was to be the central fact of Morgan’s life: that he wrote no more novels after *A Passage to India*.” (M, 333) という書き出しで始めている。フォースターは自分の親しい友人たちに小説執筆を止めた理由についていろいろなことを語っているが、最も明確に彼の本音が表明されているのは先述のサスン宛の手紙文である、とボーマンは考えている。

ボーマンはフォースターが小説を書かなくなった理由についていくつかの仮説を挙げて検討している。その理由としてまず取り上げられているのは「フォースターはエドワード朝の作家であり、そのエドワード朝が第一次世界大戦勃発の年、1914年に終わるとともに彼は小説家としては筆を折ったのだ」<sup>10)</sup> という点である。しかし、彼女は多くの批評家たちのこのような見方には根拠がないとしてこれを否定している。というのも、彼の小説の背景の多くはエドワード朝であるかもしれないが、『インドへの道』の中に1919年に起こったアムリッツァー事件を示唆するような名前の人物も登場しており、1920年前後が物語の背景であるとも考えることもできる。しかし、この物語の時代背景はこれより前の時代であるとも考えることも可能であり、正確にその時代を特定することはできない。従ってフォースターをエドワード朝について書く作家だと決めつけることはできないのである。

ボーマンはフォースターが小説の執筆を止めることを決意させたその他の要因について次のように述べている。

Many other reasons have, over the years, been put forward for Morgan’s ceasing to write novels, most frequently that the world after the 1914-18 war was a new one that he felt unable to understand with the depth necessary for

the novelist's vision. But the overriding reason was well understood by Morgan himself: 'weariness of the only subject that I both can and may treat'. He was bored of writing about heterosexuality, bored of being unhappily homosexual and not being able to write about it; and, as he wrote in a private memoir, 'I have never tried to turn a man into a girl, as Proust did with Albertine, for this seemed derogatory to me as a writer. Although great art notoriously springs from unhappiness, the source of Morgan's misery was not something that he could—publicly—express. Then, when he was happier, he lacked the impetus to write. His friend Noel Annan was to remark: the reason why he lacked it was 'that people write very often out of unhappiness and that in the 1920s he found a new kind of personal happiness'. This was true, but it was a happiness that was a long time in coming. (*M*, 336)

まずポーマンは、フォースターが小説を書くことを放棄した第一の理由について、彼が第一次世界大戦後の世界に対してもはや小説家としての新しいヴィジョンを抱くことが出来なくなったことという点を挙げている。この点については M. マリー (Middleton Murry) の “the planning of Mr. Forster's next novel should carry him well on to the unfamiliar side of the grave” という言葉がしばしば引き合いに出される<sup>11)</sup>。この言葉の意味について F. キングは次のように述べている、すなわち、マリーがこの言葉で言おうとしたことは、『インドへの道』におけるマラバー洞窟の中のムア夫人の体験と同じように、フォースターは広大な宇宙の恐怖とその宇宙の卑小さを同時に実感する状態に到達してしまった。それ故にもはや語るべきことは何もなくなった彼が次の小説を構想するとすれば、その舞台はあの世という未知の世界になってしまう、ということだ。これが上記の言葉に関するキングの解釈である。また彼は、フォースター自身の “I have nothing more to say” といった言葉に言及したり、“England and the world had both changed so much that he [Forster] could no longer embrace

them imaginatively in all their 'gigantic horror'”<sup>12)</sup>と述べたりして、フォースターは「巨大な恐怖となった世界に想像力を働かせて取り組むことはもはや出来なくなってしまったのだ」という解釈を示している。

先ほどのポーマンの引用で、フォースターは異性愛について書くことに飽き飽きしたこと、および同性愛について自由に書けないこと、あるいは書けたとしても同性愛者の不幸な物語しか書けないことに嫌気が差したことが小説執筆を止めるに至った重要な理由だと述べられている。ポーマンは、フォースターの作家活動は彼の同性愛者としての実践と深い関係があると述べているが、これは実に示唆に富む指摘であると思われる。彼女の意見では、フォースターの友人のアナン(Noel Annan)は、一般的に優れた芸術作品というものはその作家の「不幸な境遇」から生み出されることがある、フォースターの例がそれに当たり、当時フォースターが抱えていた「不幸」とは「同性愛に関する表現がタブーであったこと」であった。当然のことながら、当時自らの同性愛に関する性向については口にするすらはばかられる状況にあった。1924年前後のフォースターは同性愛者として満たされぬ思いで過ごすことが多かったとのことであるが、その満たされぬ思いやエネルギーが創作活動に注ぎ込まれていたというのである。しかしながら、1929年にフォースターは理想的な「恋人」、ボブ・バッキングム(Bob Buckingham)と出会い、以前には味わったことのない性的満足感を抱いて生活することができるようになった<sup>13)</sup> そうなると、アナンの意見に従えば、フォースターの想像力も創造力もその働きは低下することになる。事実彼は小説を書かなくなったばかりか、ノンフィクションの文章についても明らかな衰退が見られるという指摘もある<sup>14)</sup>

ポーマンは、上記のアナンの意見に同調している。彼女は、フォースターの作家活動と彼の同性愛の性向とは密接なつながりがあると考えている。フォースターの「性生活」の満足度と作品の生産力との間には逆比例の関係が見いだせるというアナンやキングの指摘が正しいとすれば、そこに一体どのような力学が働いていたのか、また、実際のところ彼の同性愛の性向がどのような内実



のものであったのか、これらの問題についてさらに詳細に検討する必要がある。

(以下次号)

○本論において引用した書物のタイトルの省略形一覧

- TC *Two Cheers for Democracy* (London : Edward Arnold, 1951)
- CM *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster* (London : Oxford UP, 1996)
- M *Morgan : A Biography of E. M. Forster* (Sceptre edition, 1994)
- SE *Selected Letters of E. M. Forster* Vol. II (Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1985)

#### 注

- 1) Cf. E. M. Forster, "What I Believe," in *Two Cheers for Democracy*. (London : Edward Arnold, 1951) の全文。
- 2) 小野寺健「怠惰を認めることについて——E. M. フォースター覚書 8, 『E. M. フォースター著作集第8回第6巻月報』(1995年1月), 5頁
- 3) 同上書, 7頁
- 4) Cf. E. M. Forster, "Tolerance," in *Two Cheers for Democracy*. (London : Edward Arnold, 1951), p. 44.
- 5) *Ibid.*, pp. 44-5.
- 6) Nicola Beauman は本書の「序文」で "I have opted for the more intimate 'Morgan' rather than the more impersonal 'Forster'; ..." (M, 3) と述べ、この伝記のタイトルも親しみのある洗札名の「モーガン」を使うことにしたと説明している。以下、本論文の中では本書を『モーガン』と表記する。
- 7) 岡山勇一「『ハワーズ・エンド邸』の英国性」, 『言語文化研究』第18巻第1号(1998年9月), 82-84頁を参照されたい。
- 8) Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster* (London : Oxford UP, 1966), p. 8.
- 9) *Ibid.*, p. 8.
- 10) Nicola Beauman, *Morgan : A Biography of E. M. Forster* (London : Hodder & Stoughton, 1993 ; Sceptre edition 1994), p. 334.

- 11) Francis King, *E. M. Forster* (London : Thames and Hudson, 1978), p. 74.
- 12) *Ibid.*, p. 76.
- 13) *Ibid.*, pp. 80-81.
- 14) *Ibid.*, p. 76.

### 引用文献

- Forster, E. M. *Two Cheers for Democracy*. London : Edward Arnold, 1951.
- Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain : A Study of E. M. Forster*. London : Oxford UP, 1996.
- Beaman, Nicola. *Morgan : A Biography of E. M. Forster*. London : Hodder & Stoughton, 1993 ; Sceptre edition, 1994.
- Lago, Mary & Furbank, P. N. *Selected Letters of E. M. Forster* Vol. II. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1985.
- King, Francis. *E. M. Forster*. London : Thames and Hudson, 1978.
- 小野寺健「怠惰を認めることについて——E. M. フォースター覚書8」, 『E. M. フォースター著作集第8回第6巻月報』(1995年1月)。
- 岡山勇一「『ハワーズ・エンド邸』の英国性」, 松山大学学術研究会(編)『言語文化研究』第18巻第1号(1998年9月)。